

医書『チャラカ本集』に伝えるヴァイシェーシカ哲学説

宮 坂 宥 勝

『チャラカ本集』(Caraka-saṃhitā)は、最古のインド医学書の一つである。現存のものは、全八篇より成る。八世紀のチャクラバーニ・ダッタ(Cakrapāṇidatta)の注解書(Ayurveda-dīpikā)があるが、それより以前にペルシャ語に翻訳され、また八〇〇年頃にはアラビア語に翻訳された程に著名なものである。チャラカ(Caraka)自身の言葉によれば、古くより伝えられた『アグニヴェーシャ本集』(Agni-veśa-saṃhitā)を増補したものであるが、不完全なので、七世紀乃至十世紀間に現われたドゥリダバラ(Dr̥ḥabala)なる医師が第七、第八篇を補足し、同時に前の部分に対しても修補を加えたといわれる^①。

チャラカは、『雜宝藏經』、『付法藏因緣伝』などの中国文献によると、カニシカ王(Kaṇiśka 一二九—一五二年即位)の

侍医として伝えられ、王と同時代(一〇〇—一五〇年頃?)におけるカシミール地方の内科医である。チャラカがカニシカ王と同時代に生存した人であることは、つとにヴィンテルニッツ、ヨリ、バーネット、スワリ、マクドーネルなどの外国諸学者も等しく認めているところである。なお、筆者の検出によれば、ヤシヨースित्र(Yaśomitra)が『俱舍論釈』(Abhidharmakośavyākhyā)^②のなかで、仏教では「六種の味」を数えるのに対してチャラカは「六十三味」を説く旨を記しているから、かれの学説は後の仏教徒の間にもかなり知れわたっていたらしい。

さて、『チャラカ本集』は、たんに古代医学の知識を伝える貴重な文献であるのみならず、当時におけるもろもろの哲学・宗教・倫理思想をも窺知するに足るものとして、インド思想

の研究上、つとに注目されている。ことに初期のサーンキヤ・ヴァイシェーシカ・ヴェーダーンタおよびニヤーヤの哲学思想を伝える点で、看過し難い資料といわなければならない。*

*ニヤーヤについては、宇井博士『印哲研究』第二(四二七—四七一頁)、『チャラカ本集に於ける論理説』、さらにヴェーダーンタについては中村元博士『初期のヴェーダーンタ哲学』第五節(四七二—四八〇頁)、『自然哲学書とヴェーダーンタ哲学』がある。

ヴァイシェーシカ学説の検討が当面の課題であるが、『チャラカ本集』とはほぼ同時代の著作である『大毘婆沙論』、『大莊嚴論経』、『仏所行讃』、『方便心論』などに見えるインド哲学の僅少の断片に比して、『チャラカ本集』ではサーンキヤならびにヴァイシェーシカ両学説を採用して医学の理論的根拠たらしめている程であるから、ヴァイシェーシカ学説も相当まとまつたものが保存せられている。

ところで、これまでに本書中に六句義を説く事実を指摘した外国学者がなかつたわけではない。たとえば、ウィンテルニッツ、マクドーネルなどの諸論文がそれである。しかし、現存の『ヴァイシェーシカ・スートラ』その他の関係諸文献に照して、それらに仔細な検討を加え、スートラ説との異

医書『チャラカ本集』に伝えるヴァイシェーシカ哲学説

同、あるいはその学説の特徴に関して発表したものにまだ接しない。そこで、一応関係箇所を偶頌を翻訳して批判を加えてみたいと思う。なお予め注意しておくべきことは、已述のごとく本書は同一作者の筆に成るものでなく、後人の増補修正があるという述作上の複雑な事情についてである。したがって、そこに認められるヴァイシェーシカ学説が直ちにすべてチャラカの伝えるものか否か、にわかに断定し難い憾みが存するのであるが、それを考慮に入れた上で論述をすすめてゆき、最後に結論を見出すこととする。

一

第三篇(Vimānasthānam) 第八章 (rogahisagjityam vimānam) には医師の教養に資する目的をもつて書かれた論理学がみられるが、そこで、

(第廿九頌)

「実体・属性・運動・普遍・特殊・内属は、それぞれの定義をもつて、シュローカ・スターナのなかで、前に説明された。」

dravya-guṇa-karma-sāmānya-viśeṣa-samavāyah sūtra-

ksānāṇ ślokaṣṭhāne pūrvam uktāḥ //

とある『シュローカ・スターナ』とは、本書第一篇スト
ラ・スターナ (Sūtrasthāna) の別名である。この第一篇第
一章は「アーユル・ヴェーダ」(Āyur-veda) を説くが、そこ
でチャラカは、まずヴァイシェーシカの普遍と特殊に言及
する。注解者によると、これらの句義説はほとんどが生命科
学の基礎をなすものである。

〔第四四頌〕

「普遍は常にあらゆる存在 (bhava) について拡張の因
である。そうして特殊は縮少の因である。しかも両者は
傾向をもつ。」

survadā sarvabhāvānām sāmānyam vṛddhikaraṇam/
bhāsaheturviśeṣaśca, pravṛtīrūbhayaśya tu //

これは普遍と特殊の特徴を概括的に説いたもので、この通
りのものは現在のストラに見出し難い。ただ、両者には傾
向 (|| 性向 pravṛti) ありとするのは、普通と特殊は基準の
定め方いかんで決定される相対的なものであるとの意で、「普
遍と特殊とは覚知にもとづく」 sāmānyam viśeṣa iti buddh
-yapekṣam. VS. I, 2, 3. ところのを予想せしめる。

また次の要約的な文言もこのままの形ではストラに見
されないが、現存ストラの I, 2, 4 ~ 17 までの普遍と特殊に
関する十四経が参照されるべきである。あるいは当時これと類
似的の形のストラが存したのかも知れない。

〔第四五頌〕

「普遍は唯一性を生ずるが、特殊は個別性を生ずる。何
となれば、普遍は類同の事物性であるが、特殊は然らざ
るがゆえに。」

sāmānyam ekatvakaram, viśeṣas tu prthaktvakṛt /
tulyārthata hi sāmānyam, viśeṣas tu viparyayaḥ
//

引続いて示される二頌は純粹のヴァイシェーシカ学説では
なく、サンキヤ哲学が混淆している。(それゆえ、版によ
つてはこの二頌を削除したものもある。)

〔第四六頌〕

「有性・アートマンおよび身体というこの三つのもの
は、あたかも三杖のごとくである。(三者の) 結合によつ
て世間は存立する。そこで (この世界において) 一切 (の
業果 karmaphala など) は確立せられる。」

sattvam ātmā śarīraṃ ca trayam etat triḍaṇḍavat /
lokaś tisthātī saṃyogāt tatra sarvaṃ pratiśṭhitam
//46//

チャクラパーニダッタの注解によれば、有性 (sattva) は意である。また身体を生命 (āyur) とすれば、有性とアートマンはその身体の基体となるプルシャであつて、アートマンを認めることにより覚 (buddhi) ・我慢 (ahamkāra) が認められるとする。さらに身体はその場合、感官・対象 (artha) ・身体と結合されたもの (śarīrasambaddha) を意味する。業果があれば知 (jñāna) ・無知 (moha) ・楽・苦・命 (jivita) ・死 (maraṇa) ・自性 (svatā) が存する。

〔第四七頌〕

「それ (|| 有性・アートマン・身体) はプンス (pums || 男性 puṃliṅga) であり、かつそれは知性 (cetanā || jñānavat) である。また、それはこのヴェーダの^⑧基体なりと教えられる。何となれば、そのためにこのヴェーダは明らかにされるから。」

sa puṃmaṇś cetanaṃ tac ca tac cādhikaraṇaṃ smṛt-
am/vedasyāśya, tadārthaṃ hi vedo 'yaṃ saṃprakā-

医書『チャラカ本集』に伝えるヴァイシェーシカ哲学説

śitah//47//

「プンス」はサーンキヤ哲学ではプルシャを指し、それは知性たることをまたない。ところで、チャクラパーニダッタは有性・アートマン・身体の三者をプンス (|| 男性) と解しながら、しかも有性すなわち意を無知 (acetana) にして有作用 (kriyāvat) とみなし、アートマンを知者 (cetayitr) とするのであつて、この点にヴァイシェーシカ的な理解が認められるわけである。なぜ、このような異質の二頌がここに存するか明らかでないが、普遍と特殊 (sāmānyavīśeṣa) の問題が提起されたので、おそらくそれと関連して有性 (sattva || satta, bhava) が取りあげられたのであろう。

チャラカは実体の種類について、次のごとく伝える。

〔第四八頌〕

「空など・アートマン・意・時および方が、実体のすべてである。感官ともなるもの (|| アートマン) は精神的実体であり、感官なきものは非精神的なものである。」

kṣāḍīny ātmā manah kālō dīśaś ca dravyasaṃgrahaḥ/
sēndriyaṃ cetanaṃ dravyaṃ, nirindriyaṃ acetana-
m//48//

「空など」は五大であるから、韻文のために順序に多少の差異あるも、前半偈は九実体に言及したもので、VS. I. 1. 5 と符合する。後半偈の感官の有無にもとづく実体の二分法は、現存のストトラ、その他のヴァイシェーシカ固有の文献にはない。

〔第四九頌〕

「対象をとまなうもの（|| 色・味・香・触・声）重さ、覚知、意志的努力に至るまでのもの、遠隔（性）などが属性であると説かれる。意志的努力（における意）などの運動は作用であるといわれる。」

sārthā garvādāyo buddhiḥ prayatnāntān parādāyah /
guṇāḥ proktāḥ, prayatnādi harma cestitām ucyate //

49//

前半偈は、属性の種類を列挙する VS. I. 1. 6 に該当する。意志的努力に至るという点からも十七属性を説くストトラ説と合致するが、重さを数えているのは、プラシャスタパード（Prāśastapāda）に至る中間的性格を示している。後半偈は VS. V. 1. 1 の「手における運動は、アートマンとの結合と（アートマンの）意志的努力によつて（生ぜられる）。」ātma-samyogaprayatnābhyām haste karma とあるを予想せし

め、逆に身体における非意志的な行為、たとえば睡眠の働きのごときは、意志的努力なき場合に生ずるといい得る（cf. yatnābhāve prasuptasya calanam VS. V. 1. 13）。さらに運動についてチャラカは、他の箇所^⑤で五種の運動（pañcakarmā, ni）に言及するから、確かに VS. I. 1. 7 を知つていたに相違ない。これは『大毘婆沙論』^⑥にも説かれている。

〔第五〇頌〕

「たとえば、地と（香という）属性との非個別的な情態が内属関係であると考えられる。それ（|| 内属関係）は常住である。何となれば、およそ（常住の）実体があるところでは、属性は無常ではないから。」

samavāyo 'pṛthagbhāvo bhūmyādīmāṃ guṇair mataḥ /
sa nityo, yatra hi dravyam na tatvānityato guṇaḥ
//50//

内属関係の常住性についてストトラには明文がない。後半偈は VS. VII. 1. 3. 4 に該当する。

次に、実体および属性の特徴をのべていう。

〔第五一頌〕

「それに運動・属性が依存し、内属因なるものが実体で

ある。しかしながら、属性は内属関係を有し（＝実体に依止して）（結合と分離において独立の）因たらずものである。」

yatrāśritāḥ karmaguṇāḥ kāraṇaṁ samavāyi yat /
tad dravyaṁ, samavāyi tu niśeṣaṭāḥ kāraṇaṁ guṇaḥ
//51//

前半偈は「実体の特徴は、作用と属性を有し、内属因であることである」*kriyāguṇavat samavāyikāraṇam iti dravya-lakṣaṇam* VS. I, 1, 15 の引用。また後半偈は「属性の特徴は、実体に依止し、属性を有することなく、結合と分離において独立の因たらずである」*dravyāśrayaguṇavān saṁ-yogavibhāgeṣv akāraṇam anapekṣa iti guṇalakṣaṇam*. VS. I, 1, 16 を省略引用したものであることが明らかである。チャラカは、引続き運動の特徴を次のごとく説く。

〔第五二頌〕

「結合と分離とにおける（独立の）因であつて、実体を所依とし、作さるべきところのものに対する作用が運動であり、運動は他（の運動）に依らない。」

saṁyoge ca vijoge ca kāraṇaṁ dravyam āśritam /

医書『チャラカ本集』に伝えるヴァイシェーシカ哲学説

kartavyasya kriyā karma karma nānyad apekṣate
//52//

前半偈は「運動の特徴は一実体を有し、属性を有することではなく、結合と分離とにおいて独立の因たるもの、といふことである」*ekadravyam agunaṁ saṁyogavibhāgeṣv anapekṣakāraṇam iti karmalakṣaṇam* VS. I, 1, 17 とほぼ一致する。ただ現存スートラは「属性を有することなく」*agunaṁ* とある相違をみる。後半偈は「運動は運動を生ぜず」との意味だから、*karma karmasādhyaṁ na vidyate*, VS. I, 1, 11 を予想したものに相違ない。

以上のごとく、『スートラ・スターナ篇』における六句義の定義および特徴の説明をみると、チャラカは明らかに『ヴァイシェーシカ・スートラ』もしくはそれに相当すべきスートラに通暁していたことが分かる。しかも VS. I, 1, 15, 16, 17: VS. I, 1, 5, 6 を引続き引用、または他のスートラに言及するから、少なくとも現存スートラの第一篇の該当部分に関する限り、二世紀中葉に已に現存形態が成立していたとみて差支えなからう。したがってまた、『ヴァイシェーシカ・スートラ』に通じていたものは仏教のナーガールジュナ（龍樹）をもつて最古

とするとする従来の見方は修正されなければならない。

二

第三篇第八章に五支作法を説明する。ここに用例としてプルシャ（＝アートマン）の常住なることを虚空に喩えているのは、ヴァイシェーシカのアートマン論である。

〔第三一頌〕

「『プルシャは常住である』というのが、主張命題である。

『非所作性のゆえに』というのが、理由命題である。

『虚空のごとし』というのが、比喻命題である。

『非所作性の虚空のごとく、プルシャもまた然り』というのが、適合命題である。

『ゆえに、（プルシャは）常住である』というのが、結合命題である、というがごときである。』

yathā-nityaḥ puruṣa iti prajñā, hetuḥ-akṛtakatvād
iti,
dṛṣṭāntaḥ-yathā akāśam iti, upanayaḥ-yathā cākṛta-
kam akāśam,

② tathā puruṣa iti, nigamanam-tasman nitya iti.

次に、第三篇第八章に、「四種の定説」を説くうち、第三の特殊学説を許す定説の実例として、

〔第三七頌〕

「ここ（＝自説）では五つの感官あり」とするのは、ヴァイシェーシカの感官論を指すのであり、これは『大毘婆沙論』にも言及せられるところである。

第四篇（Śārirasthānam）第一章（kāṭīhātupuruṣīyam śāriram）の第五九一六二頌にわたり、プルシャ（＝アートマン）の存在が説かれるが、その存在の証相をチャラカは次のごとく述べている。

〔第七二頌〕

「欲望・嫌惡・快感・不快感・意志的努力・精神性・思慮・覚知・憶念・自我意識（我慢）が、最高我の（存在の）証相である。」

icchā dṛveṣaḥ sukham duḥkham prayatnāś cetanā
dhṛtiḥ /
buddhiḥ smṛtir ahaṃkāro līngani paramātmānaḥ //
//

「最高我」の語がみられることが現存スートラと異なるのは、
はみりながら、本頌は *prāṇāpāna-nimesōnimesa-jivana-ma-*
nogatindriyāntara vikārāṇ sukha-duḥkhechādveśa-pray-
atnaścātmano līṅgani VS. III, 2,4 と大体一致する。しか
し、なお詳細に对照してみると、(A)プラシャスタパーダ以後
のもの、⁽⁴⁾(B)現存の『ヴァシェーシカ・スートラ』および『大乘
掌珍論』所伝のもの、⁽⁵⁾(C)『大智度論』、『婆藪鞞尸論』、『青目
釈中論』などに引用されたもの(おそらく(C)の一群が VS. III
2,4 の原型かと推察せられる)のいずれとも異なり、むしろ
NS.I,1,10 *icchādveśa-prayatna-sukha-duḥkha-jñānāny-*
ātmano līṅgam と著しく類似する点に注意すべきであらう。
ただし、順序の相違があるのは『チャラカ本集』が韻文のた
めであり、また *dhṛti, buddhi, smṛti, ahankāra* ⁽⁶⁾を『ニヤー
ヤ・スートラ』では簡単に *jñāna* の一語に総括して表現する
に至っている。

アートマンと意との結合関係もまた VS.III,2,1にみえるが、
これに関してチャラカは二頌を用いて示す。

〔第七五頌〕

「意は非精神的なものであるが作用を有し、最高者は発

動者である。その遍在(のアートマン)が意と結合され
るとき、もうものの作用ありといわれる。」

acetanani kriyāvac ca manas cetayitā parah /
yuktasya manasā tasya nirdisyante vibhoh kriyāḥ
///

〔第七六頌〕

「そうして、アートマンは精神を有するものであるか
ら、能作者といわれる。然るに、意は非精神的なもので
あるから、たとえ作用を有するも、(能作者に)あらずと
いわれる。」

cetanāṁ yataś cātma tatāḥ kartā nirucyate /
acetanatvāc ca manah kriyāvad api nocyate ///

アートマンを「最高我」もしくは「最高者」とよぶことは、
現存のスートラにはない。しかし、ここにいるそれは意と結
合されうるものであるから、同時に個人我たる性格を有する
アートマンであつて、これは全くヴァィシェーシカ哲学のア
ートマン観に外ならない。アートマンは発動者であるが、意
との結合において実際に働き出すべきものである。アートの
遍在性は VS.VII,1,22 にも説かれる。すでに実体の二

分法(第一篇第一章第四八頌)で示された通り、アートマンは精神的実体であり意は物質的存在たることが知られるが、アートマンを「能作者」の語で呼ぶことは、まだストトラにはない。意じたいは作用を有するが、それは作用せしめられるもので、作用の当体すなわち能作者たりえぬという考え方は、『中観心論註、論理の炎』第七章に伝える。^⑮

さらに、チャラカはヴァイシェーシカ哲学の解脱論を述べていう。

〔第四篇第一章第一五四頌〕

「かの最終の(業)を捨離したとき、すべての知覚は
想・認識・識別を生じないものとなり、完全に止滅に至る。」

tasmīnś caram asamnyāse samutlah sarvavedanāh /
⑮ asanjñānāvijnānā nirvṛtim yānty aśeśatah ///

〔第四篇第五章第一三頌〕

「解脱は止滅である。それは最高のものである。それは
寂靜である。それはブラフマンである。それは解脱である。
ここに解脱を願う人びとのゆくべき道をわれわれは
説こう。」

nirvṛtīr apavargah tat param praśāntam tat tad
aksaram tad brahma sa mokṣah /

tatra mumukṣūṇām udayanāni vyākhyāsyāmaḥ ///

このように解脱の状態を述べているのは、注意すべきである。すなわちヴァイシェーシカにおける解脱の状態に関して触れた古文獻に、『パダールタ・ダルマサンガラハ』(padārthadharma-saṃgraha)、『論理の炎』第七章があり、いづれも解脱の状態を灯火の消滅に譬えている。^⑯ ニヤーヤ系統でもヴァーツヤヤナはヴェーダーンタ哲学の解脱常楽説を排撃して、不苦不楽説を主張し、下つてジャヤンタは石の比喻を説くように、およそ同一の思想傾向を示すが、遡つて『ヴァイシェーシカ・ストトラ』には全然これに触れない。ゆえにチャラカのそれは一応最古の消息を伝えるものといえよう。さらに解脱の用語として apavarga を用いるのは、『ニヤーヤ・ストトラ』と同じである。

三

以上みたごとく、チャラカは『ヴァイシェーシカ・ストトラ』およびヴァイシェーシカ学説に通じ、現存ストトラの少

なくとも第一篇は当時すでに成立していたので、それをチャラカが引用したに相違ない。だが、現存スートラとの相異点も見のがしえない。それらを要約すると、(1)重さを属性とする(2)内属を常住とする(3)能作者としてのアートマンを説く(4)解脱の状態を止滅(nivṛti)であるとするの四項となるが、いずれも『バダールタ・ダルマサングラハ』、『論理の炎』第七章に認められて現存のスートラにはない。この事實は、これらの所説のみが後の増補の結果生じたものか、然らざればチャラカと交渉ありし二世紀前半のヴァイシェシカ学者の知っていた説は『ヴァイシェシカ・スートラ』よりもやや進歩したものが存したことを語る。これについて、論理学説の面から検討してみたいと思う。

第一篇(Sūtrashānam) 第一章(cisraisaṇīyō'dhyāyaḥ)において直接知覚および推理の定義を示している。

〔第二〇頌〕

「アートマン・感官・意・対象の接触から生じ、現在時において現われるところの覚知が直接知覚なりと説かれる。」

ātmēndriyamano 'rthānām saṃnikarṣāt pravartate/

医書『チャラカ本集』に伝えるヴァイシェシカ哲学説

vyaktā tadāṭve yā buddhiḥ pratyakṣaṇ sa nirvya-te// //

〔第二一頌〕

「三種のものは直接知覚にもとづき、しかも三時(一)過・現・未)において類推される。(たとえば、)隠された火は煙によつて、交情は子宮を見ることによつて(推理されるがごとし)。」

pratyakṣapūrvam trividham trikālam cānumīyate/
vahnir nigūḍho dhūmena maithunam garbha-
darśanāt // //

直接知覚の生起に関する説明は、『ヴァイシェシカ・スートラ』ならびに『ニヤーヤ・スートラ』の所説と同じである。ただし、前者の場合、直接知覚は現在時に働き、推理は三時にわたる認識作用であることは明言せられず、また三種の推理には触れない。『ヴァイシェシカ・スートラ』に散見せられる六種の推理様式を肯定・否定の二面をもつて整理すれば、三種の推理がえられるから、チャラカの伝えるものはスートラ説より発達したものである。三種の推理は確かにヴァイシェシカに起源を求めうるものであつて、五支作法とは伝承

系統を異にする。²³⁾したがって、『ニヤーヤ・スートラ』より以前に『チャラカ本集』がすでに三種の推理説を伝えている事実は十分注目されてよい。^{*}

・宇井伯寿博士は『印哲研究』第二卷五二〇頁で「三種の比量を説くことはチャラカ本集の論理説中にもなかつたもので、此の論（『方便心論のこと』が最初である）」といつておられる。これは『スートラ・スターナ篇』を見なくて、『ヴィマーナ・マールガ篇』を参照されたがためであらう。

第一篇で如上の直接知覚説を示すが、さらに第三篇第八章にもこれを再言している。

〔第三九頌〕

「ここに直接知覚あり。直接知覚とはアートマンと五つの感官とによつて自ら知覚されるところのものである。そのうち、アートマンの直接知覚は快感・不快感・欲求・嫌悪などである。そうして感官による直接知覚は声などである。」

²⁴⁾ aitra pratyakṣam, pratyakṣam nāma tad yad ātmajā
pauṇendriyaś ca svayam upalabhyate, tatratnampra-
tyakṣaḥ sukhaduhkhechādveśādayaḥ, śabdādayas tv
indriyapratyakṣaḥ //

アートマンに内属する覚知などの六つの属性は、現存のスートラ説より推すと、普通の場合、直接知覚の対象とならない。一般に直接知覚が生起するためには、その対象は大(マハ・^{マハ}cat)にして非一の実体(aneka-dravya)、かつ色(ルパ)を有することを必要とし(VS.IV,1,6)そのいずれの条件をも満足しなければならぬ。したがって微塵・時・方・アートマン・意は、直接知覚の対象たりえない。すでにアートマンが然るならば、アートマンの六つの属性も直接知覚のものとならない。これ、スートラ説の要旨である。しかるに、『パダルタ・ダルマサングラハ』、『勝宗十句義論』では、アートマンの六つの属性はすべてアートマンと意との結合によつて直接知覚されるとする。チャラカ所伝のものは、この後者と一致する。

転じて、右のごとき論理説を『ニヤーヤ・スートラ』を考慮に入れてみるならば、

(一) アートマンの存在の証相の説きかたは、『ニヤーヤ・スートラ』に近い。

(二) 『チャラカ本集』(第一篇・第四篇)では四量を説くが、これはニヤーヤ説で、原始ヴァイシェーシカ説では

二量である。

(三)直接知覚は現在時に働くというのは NS.II.1.8~19の十二経に、また推理が三時に働くとするのは NS.II.1.39~43の五経に詳述するが、ヴァイシェーシカ哲学では説かない。

(四)三種の推理は NS.I.1.5 にも認められる。ヴァイシェーシカでは六種の推理を説く。

(五)「五支作法」も『ニヤーヤ・スートラ』の継承するところである。ヴァイシェーシカでは後にプラシャスタパードが推理の種別を示すのに用いる可見(*dṛṣṭa*)と共見(*sāmanayato dṛṣṭa*)の二語が見出され、とくに共見によつて二物間の証相の共通性が自覚されていたにもかかわらず、五支の論証式はまだ『ヴァイシェーシカ・スートラ』にはない。

このように論理説の面からみて、『ヴァイシェーシカ・スートラ』と『チャラカ本集』所伝のヴァイシェーシカ哲学説との間には逕庭が認められ、むしろ『ニヤーヤ・スートラ』とチャラカとにきわめて緊密な共通点を見出すことができる。

この点はチャラカの生存年代とニヤーヤ学派成立の年代がほ

ば一致するとする学界の見解をさらに支持するに足るものといえよう。しかし、チャラカに伝えるヴァイシェーシカ学説は現存のスートラより発達した点が見受けられるのであつて、これにより、スートラの成立編纂の年代とチャラカの時代との間にかなりの歴史的な距離を想定する外ないと思う。

ただ右のヴァイシェーシカ学説が果してすべてチャラカの伝えるものか否かという問題が残る。これに関して簡単に私見を述べると、ヴァイシェーシカ学説に言及している箇所は、第一、第二、第四篇であるから、これはドゥリダバラの増補した部分でないことだけは確かである。しかし、その部分をドゥリダバラが修正したかも知れないという懸念がある。ところで、右の引用文のほとんどは古層に属するとせられる韻文より成る。とくにスートラを引用した部分の第一篇は『方便心論』の所説と合致し、かつそれよりやや古く成立したとせられる本書第三篇の冒頭において、さきに六句義は定義をもつて説かれたと断わり、ことに篇名まで指摘している程であるから、まずドゥリダバラの補筆したものではなからう。そうだとすれば、スートラの成立年代推定に当つて『チャラカ本集』もまた一顧を要する重要な資料だといえる。^②『チャラカ

本集』に引用または関説せられる『ヴァイシェーシカ・スートラ』を整理してみると、次のごとくである。今は一応この事実を指摘するに留めて、識者の是正を仰ぎたい。

1-5	(アンダーラインをし
1-6	た偈頌は、現存のスー
1-7	トラとはほぼ一致する
1-11	か、同一のもの)
1-15	
1-16	
1-17	
2-3	
2-4	
2-4	
2-1	
2-3	
2-22	

〔付記〕筆者は最初、金倉先生より貸与された *Caraka-saṃhitā*.

Ed. Yādvāsaśarmaṇa Trivikramācārya. Bombay. 1922 を依用し、必要に応じて第三篇は宇井博士『印哲研究』第二巻の附録校訂文を参照した。成稿は、昭和廿七年十一月で、その後十年間筐底に秘したままであった。最近本学高木神元講師より *Vaidya Tadvaji Trikanji Acārya: The Charakasamhitā by Agniveśa, revised by Charaka and Dīdhabala, with the Ayurveda-Dīpikā Commentary of Chakrapāṇidatta. Bombay. 1941* を拝借する機会に恵まれたので、諸版の対照、偈頌の読み方の訂正などによって、旧稿を再治することができた。これらの方がたに心からの感謝を献げる。なおチャクラパーニダッタの注解にはブラシヤスタパーダその他よりヴァイシェーシカ説を引用しているので、それはそれとしてまとめて後日発表したいと思う。なお、初稿当時、筆者は故熊谷岱蔵博士より *English translation of Charaka-saṃhitā. by Kaviraj Avinash Chandra Kaviratna. Calcutta* 披見の便を与えられたことを付記し

る。

(昭和廿七年十一月稿、卅八年七月再治)

〔註〕

- (1) L.D. Barnett: *Antiquities of India. Chap., VIII. Medicine. p.220f. Macdonell: India's past. VII. Technical Literature. p.175ff. Julius Jolly: Medizin. s.11~12.*
- (2) U. Wogihara: *Abhidharmakośavyākhyā. I. p.27.*
- (3) 『大毘婆娑論』大正、二七卷五八七頁上、七二九頁下、七三〇頁上(『轉婆沙論』大正、二八卷四四〇頁中)。
- (4) 『大莊嚴論經』大正、四卷二五八頁下および二五九頁中。
- (5) 『仏所行讚』大正、四卷三五頁中。
- (6) *Caraka-saṃhitā. p.304. (1941. p.267)*
- (7) *ibid, p.4ff. (p.9)*
- (8) チャクラパーニダッタによると、相互に結合の保たれた三つの杖が水瓶を支えるのと同じく、有性・アートマン・身体は世間を存立せしめるとの意。
- (9) 同じくチャクラパーニダッタによると、『タントラ』(tantra)を指す。
- (10) *ibid, p.13. (p.10)*
- (11) 『大毘婆娑論』第一一三(大正、二七卷五八七頁上)に、業に関して、勝論・数論・譬喻者・分別説部・法救の異説をあげることが、就中、ヴァイシェーシカ説として、『如勝論外道説二五種業』。謂取・捨・屈・伸・行為二第五業」とある。当時ごく一般に VS. I.1.7 が認められていたことが知られる。

(12) 1941, Bombay 出版本は、この間に *taeca nityam* があるが、意味をとる上では必要なので、今は削除して読む。

(13) 『大毘婆沙論』(大正、二七卷七二九頁下)に「又勝論者説有_二五根_一。鼻・舌・眼・身・耳根、為_二五_一とある。

(14) 同一形態のものは徳恵の『随相論』、『十八空論』、『論理の炎』第七章、『般若灯論』、『大乘広百論釈論』、『勝宗十句義論』および *Tattvasaṅgrahapañjika* (GOS, vol. I, p. 277) などの論作に引用されている。

(15) 『大乘掌珍論』(大正、三〇卷二七五頁下)には「諸勝論師復作_二如是説_一。諸入出息閉目開目命意行動根變等相定有_二所相_一。是能相故、如_二見_一煙等_一」とあり、これは *prāṇāpānimesō-mesaḥ* *ivāmanogahindriyāntaravikārāḥ* *ātmano līṅgāni*. VS. III, 2, 4 の前半の引用である。ところで、このストトラは仏教諸論書にもしばしば引用されるが、それらはいずれも *manogati* と *indriyāntaravikāra* とを欠く。したがって『大乘掌珍論』所引のもののみが現存ストトラのそれと符合する。

(16) 「出・入氣・視・胸・壽命・心・苦・楽・憎・精勤」(『大智度論』)「出入息・視・胸・壽命・欲・悲・苦・楽・智恵」(『百論釈』)、「出入息・視・胸・壽命・思惟・苦・楽・憎・愛・動発」(『中論釈』)。

(17) このうちの証相は『ヤージニヤヴァルキヤ法典』三・一七四一六(中野義照先生訳本、一一七頁参照)に認められる。ここに挙げられたものはストトラのそれに比して非常に混乱しているが『大乘掌珍論』以外の諸文献には存しない。「一つの感官より他

の感官への移動」と「意の活動」とを示しているのは、甚だ注意すべきである。

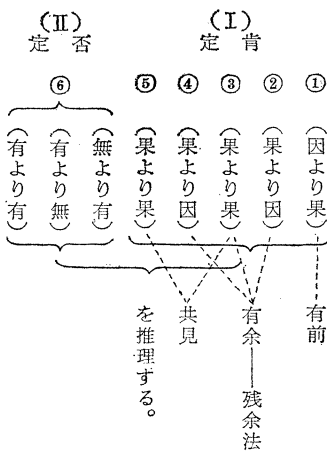
(18) 拙稿『論理の炎におけるヴァイシェーシカ哲学』(高野山大學論叢 I、五一頁以下)。

(19) Bombay 一九四一年版の *śaśanijā* を改める。

(20) *Laṅkāvatāra-sūtra* の魏訳涅槃品第六に、「仏告_二大慧_一。一中略復次大慧。復有_二外道_一。見一切法自相同相不生滅想、分別過去未來現在諸法是有名爲涅槃」(菩提留支訳『入楞伽經』大正、一六卷五四九頁中)とあり、これは提婆菩薩釈楞伽經中外道小乘涅槃論にも引用される。ところで、これに相当する梵本の部分を見ると、非常に異なっており、そこには同じく、次のようにヴァイシェーシカ解脫論が明示されている。「大慧よ。そのうちで、まず或る外道たちは、蘊・処・界を滅し、境界に着することなく、常に不共法をみるがゆえに、心・心所の聚束は転現しない。過去・未來・現在の境界を追想せず、あたかも灯火・種子・火焰のように、もろもろの取着は滅するから、分別は生じないという。ゆえに、かれらにはその場合に、涅槃の覚がある。だが、大慧よ。断見によつては(取着は)滅ばされない。」*Tatra kecit tāvān mahante tūṭhakarāḥ skandha-dhātvy-āyatananipodhāḥ viśaya-vairāgyān nityavaiśāradyadarśanaicittatratkalpo na pravar-tate* *trāṇāgatapratyutpannaviśayānānusamarupād dīpavijñālavād upādānōparanāḍ apravyatir vikalpasyeti varja-yaṅte / atas teṣāṃ tatra nirvāṇabuddhir bhavati/na ca mahamate-vināśadīpīya nirvāyate/* (『Laṅkāvatāra-sūtra. p. 182-183)

(21) 有前 (pūrvavat) 有余 (śeṣavat) 共見 (śāmanvato dṛṣṭa) を指す。ヴァーツヤヤーナは二種、ウッデイヨータカラは六種の解釈を与える。他学派、仏教にも伝えられ、インド論理学史上、重要な課題を提供している。

(22)



(23) 宇井博士『印哲研究』第二巻、四三〇頁。

(24) Bombay 一九四一年版は *cendriyais ca* チャクラパーニダッタによると、これによつて外部のもの直接知覚が認められる、とする。

(25) 宇井、第一巻三二〇頁。

(26) これについては、なおチャラカと同時代の仏教詩人アシヴァゴーシャ (馬鳴 *Aśvaghoṣa*) の著作に注意したい。かれの『仏所行讃』、『大莊嚴論経』にヴァイシェーシカ学説を伝え、『ヴァジラスーチー』(金剛針論 (*Vajrasūci*)) にも当時の学問を挙げるうち

にヴァイシェーシカ哲学を数える。『婆藪槃豆法師伝』によると、かれは「八分毘伽羅論・四皮陀・六論」に通じていたというから、バラモンの教養を身につけていた人であることが知られる。ことに『大莊嚴論経』において次のごとき伝説を述べている。仏陀の出世以前は皆ヴァイシェーシカ学説をすぐれたものと仰いでいたが、仏陀という太陽が現われてからはヴァイシェーシカは啓蒙するところがないから捨つべきである。あたかもフクロウ (*nūḥka* ヲヴァイシェーシカ学派の開祖名) は夜飛び歩くが、昼間は勢を失なうがごとくである。また同書に「説『破瓦』以為『瓶因』」とあるのは、現存のストトラになく、後の通説と一致する。これらはヴァイシェーシカ学派の起源、ストトラの成立がアシヴァゴーシヤの時代を遡りうることを暗示している。

〔付論〕

『チャラカ本集』と同時代ではあるが、それより幾分早く成立した文献に『方便心論』(後魏、吉迦夜訳)がある。このなかに論証の説示のために若干のヴァイシェーシカ哲学説が引用されている。

「今諸外道有『論法』不耶。答曰有。如『衛世師』有『六諦』。所謂陀羅驪・求那・総諦・別諦・作諦・不障諦如『斯等此皆名『論法』』」

これは順序に不同あるも原始ヴァイシェーシカの六句義である。また「如『六諦等衛世師』」ともいう。当時ヴァイシェ

ーシカの全体系が六句義としてまとめられていたことが分かる。では具体的にいつて、それはいかなるものであろうか。

「又云、声是空之求那。空非对礙、声是色法。云何相依、是名因増。」^④

原始ヴァイシェーシカでは十七属性のうちに声を数えないが、属性として取扱つているであろうことは、VS.II,1,35によつて明瞭である。しかも虚空に内属し、虚空の存在の証相たりうるものであることは、VS.II,1,24~27に証明するところである。虚空が非对礙（＝無質碍 *apratigha*）たることはヴァイシェーシカ学派・有部の共許であるが、声を色法とするのは仏教特有の説である。

「如云微塵細小、虚空徧大。如此二法則名為常。声不如是故、曰無常。是名喻増。」^⑤

微塵は細小（不可分の意味ではない）であり、虚空は遍在のゆえに、大である」（VS.VII,1,22）。かゝるともに常住の実体である。しかるに声は実体にあらずして属性であり（VS.II,2,23~24）、運動と同じく刹那滅である（VS.II,2,25）。

「我与身異故、我是常（*yathānyah śarīrad ātma nitya itī*）如瓶異虚空故瓶無常。是名類同。」^⑥

医書『チャラカ本集』に伝えるヴァイシェーシカ哲学説

身体と別箇にアートマンの存在を容認し、アートマンおよび虚空を常住なものとするのは、VS.II,2,6,11,1,28,III,2,5,にもつき明らかにヴァイシェーシカ的思想であることが知られる。

「如云虚空是常、無有触故意識亦爾。」^⑦

意識はおそらく意を指すと思われる。然れば虚空と意とともに常住にして無触であるとするのは、ヴァイシェーシカ学説であらう。

「復有人云。四大実有、何以知之。堅是地性乃至動是風性故知為実。」^⑧

四大の実在説は有部の主張するところであるが、ヴァイシェーシカ思想にも通じる。すなわち四大は実在（*sat*）であり（VS.I,1,8）、実体中に数えられる（VS.I,1,5）。

「復次、有説神常。何以知之。非根覺故。如虚空不為根覺故常。」^⑨

神はアートマンの訳語で、それは常住なものである（VS.III,2,5）。ここでは常住の理由として、感覚知覚の対象たりえぬからとする。感官は認識主体たるアートマンの作具で、ヴァイシェーシカでは四大所成とする。ストトラ説では一般

世間の人びとの場合にはアートマンは感官によつて知覚されない、すなわち非直接知覚である。したがつて、ここでもそれを述べたものであらう。同一の理由をもつて虚空も常住なものとする。ただし、ストトラではその常住性は風の場合に準じて知られる (VS. II. 1. 13) から、他の実体を有しないことが理由となる。

「問曰、神為是常為無常乎。立曰、神非造作故常。瓶等作法故は無常。」^⑩

これは玄奘訳『勝宗十句義論』に「謂此四中非所造者常、所造者無常」^⑪とあるを参照すべく、所造の実体とは結果としての地などの四大を指す。

「問曰、此二十法應分別說。答曰、增多者如云我常非根覺故、虚空非覺是為常。一切不為根所覺者尽皆是常、而我非覺、得非常也。」^⑫

風のみは因においても果においても不可見であるが、通常の実体は感官によつて把握されるか否かはそのものが無常か常住かを決定する基準となる。『勝宗十句義論』^⑬では、それを色・可見・対眼の有無に限定するが、感官一般およびその対象についても拡大解釈が可能とせられるから、おそらくここ

ではそれに通ずるものであらう。

「復次、汝以虚空非覺故常、然虚空者徧一切処、一切処物豈非覺也、是名徧同。」^⑭

虚空が非知覚のゆえに常住なることは前述のごとくである。「徧一切処」は VS. VII. 1. 22 に説かれる。

「復次、微塵非徧。而非根覺は無常法。我非根覺云何為常、是不徧同。」^⑮

これによると、「それ（＝徧在）ならざるゆえに、意は微塵（の分量）である」*tad abhāvād ānu manāḥ* VS. VII. 1. 23 とあるストトラは、微塵の不徧在を前提としたものとみられる。

「復次、汝以我非根覺同於虚空、虚空不覺我亦爾。若我覺者虚空亦應覺於苦樂虚空与我無有異故、是不相違。」^⑯

この所論もアートマンが苦樂を知覚すべきことを前提とするが、ストトラになく『チャラカ本集』に認められる。

『方便心論』は、事火外道・音声外道・医法・僧伽・瑜伽外道・尼乾陀法の若干の所説にも触れるが、もつとも多く引用するのは、右のごとくヴァイシェーシカ学説である。

現存の『ヴァイシェーシカ・スートラ』で関連のある偈頌

を纏めて示すと、上のごとくにな

る。その内容上、スートラの第三

篇まではこの時代に成立編纂され

ていたことを推測せしめる。な

お、現存のスートラ第七篇中の二

- I-1-5
- I-1-8
- II-1-13
- (II-1-28)
- II-1-24. 25~27
- II-2-23~25
- III-2-5-6
- VII-1-22
- (VII-1-23)

経を予想することも重視すべきことであろう。

〔註〕

- (1) 『方便心論』 大正、三二卷二三頁下。(2) 同二四頁上。(3) 同二四頁下(4) 同二四頁下、二五頁上。(5) 同二六頁上。(6) 同二六頁上。「如」是九実幾有触幾無触。四有触謂地水火風、五無触謂余実、「如」是九実五常四分別(『勝宗十句義論』 大正、五四卷一二六四頁上)。(7) 『方便心論』 大正、三二卷二六頁中。(8) 前掲書二六頁下。(9) 同二七頁中。(10) 『勝宗十句義論』 大正、五四卷一二六四頁上。(11) 『方便心論』 大正、三二卷二八頁上。(12) 『勝宗十句義論』 大正、五四卷一二六四頁上。(31) 『方便心論』 大正、三二卷二八頁上。(14) 同二八頁上。(15) 同二八頁中。